タイトル

土くれのネックレス

梗概

主人公は競輪選手の家城守（41）。

息子の勇人（5）は心臓の病気で入院していて、移植手術のドナーを待っている。

妻の円花（34）は、兄（家城の義兄）に家城の稼いだ金の資産運用を任せていたら、不動産投資に失敗。円花は失踪してしまう。

家城は、消費者金融の社長・曽田春貴（45）に家財道具から何からすべて奪われてしまい、タワーマンションの生活から一転、ボロボロのアパートで生活をはじめる。

国内は、感染症が拡大していき、家城は対面で勇人と会えなくなる。リモート越しに、「母親に会いたい」という勇人。

家城は取り繕おうとするが、勇人は、「母親に会いたい」としか言わない。

逃亡した円花は、曽田が見つけて保護しているが、家城は会う気持ちになれずにいた。

勇人のドナーが見つかり、アメリカで手術するため渡航を進めようとするが、

「ママに会えないならいいかない」と勇人。
家城は、曽田に頼み、円花に会いにいく。
何もかもどうでもよくなって、頽廃した姿の円花を見つけ、茫然とする家城。何とか正気を取り戻させようとするが、円花が、
「勇人のせいで自分の人生が狂った」と言い出したことにキレて首を締め、殺してしまう。
曽田と一緒に円花を山奥に埋めにいく家城。
勇人に元気だったと取り繕うが、納得せず、医師の芹沢志乃（31）の助言で、円花の身に着けていたものを勇人に渡すため、円花を埋めた山奥へ行き、死体を掘り起こすことに。
円花のネックレスを手にして病院へ戻る家城。
勇人は円花のネックレスをもってアメリカへ行き、手術は成功。
半年後、感染症が落ち着き、家城は競輪の試合で優勝。同時に曽田が警察に捕まり、円花の死体がみつかる。家城は何も知らない。
元気になった勇人が、病院内で喜んでいる所で、物語は終わる。

登場人物表

家城守（41）	競輪選手
家城円花（34）	速水の妻
家城勇人（5）	速水と円花の息子
曽田春貴（45）	消費者金融の社長
中川えみり（21）	看護師
芹沢志乃（31）	医師
その他	

○競輪場・車券販売場（夕方）

観客で足の踏み場もない。

電光掲示板のオッズ。車番「1」の家城が圧倒的な1位。

男の声「家城ぃ。お前に人生かけたぞ」

モニターにはバンク内を走る選手たち。

ドアップになる家城守（41）ヘルメットに、「1番」のマーク。

○同・バンク内（夕方）

鐘を打ち鳴らす音が場内に鳴り響く。

先導車がコースから外れると、競輪選手たちが一気にスピードをあげる。

家城が先頭。

○同・スタンド（夕方）

満員の観客。声援を飛ばす。

○病院・病室の中（夕方）

テレビ画面に映るレース映像。

家城勇人（５）ベッドの上に座り、緊張した面持ちで見ている。勇人はパジャマを着てニット帽をかぶっている。ベッドの脇に座る家城円花（34）円花は対照的に笑顔を浮かべている。モニターの中で、家城、他の選手に追い抜かれて順位を下げていく。

勇人「あっ」

勇人、円花を見て、

勇人「ママッ。パパ、大丈夫？大丈夫？」

勇人、円花に抱き着くと円花の首元に手を伸ばし、ネックレスを片手で掴む。

円花「大丈夫だから。見てて」

円花の反対の手が持つスマホがバイブレーション。液晶画面に【ソダ様】

○競輪場・最終コーナー（夕方）

家城、大外からどんどんスピードを上げて、他の選手を追い抜いていく。

○同・スタンド（夕方）
満員の客が、声援を送る。

○同・最終ストレート（夕方）
家城と熱狂する観客が重なる。
家城「おりゃあぁッ」
家城、ラストスパート。

○同・ゴール前（夕方）
家城と他の選手たち、横一線でゴールを駆け抜ける。

○病院・病室内（夕方）
モニターのリプレイ映像。家城が一位。
歓喜する勇人と円花。

○競輪場・最終コーナー（夕方）
家城、一周してスローダウンして戻ってくる。満員の客から拍手と声援。
家城、手をあげて応える。

○病院・病室内（夕方）

勇人、ベッドの上で喜んでいる。

円花が持っているスマホがバイブレーション。液晶画面には、またもソダ。

円花、スマホをもって部屋を出ようとした時、後ろで大きな音。

勇人、ベッドの上で倒れている。

円花「あっ。勇人。勇人」

円花、慌ててナースコールを押す。

○競輪場・バンク内（夜）

表彰式。

家城、賞金３００万円のプレートを持ち、笑顔。家城の前にカメラマンが並び、写真撮影が始まる。あちこちから家城を呼ぶ声。家城、笑顔で応える。

○同・受付（夜）

家城、紙袋を受け取る。中には万札がぎっしり。レース３日間の合計金額な

ので２０００万近くある。
家城、平然と受け取る。
若い選手たちが羨望の眼差しで家城を見る。

○病院・病室内（夜）
家城、笑顔で飛び込んでくる。
家城「勇人ぉ」
家城、ぴたっと立ち止まる。
勇人、呼吸器をつけて寝ている。
円花「あ、あなた」
家城「…どうしたんだ？」
円花「ちょっと興奮しすぎちゃったみたい。大丈夫です。いつものことだから」
家城「ほんとか？」
円花のスマホがバイブレーション。
家城、ぎろっと円花を見て、
家城「こんな時くらい、スマホ切っとけ」
円花「す、すいません」
円花、スマホの電源を切る。

○タワーマンション・地下駐車場入口（夜）
家城の運転する外車（助手席に円花）
が中に入っていく。

○同・駐車場（夜）
家城、後部座席に手を伸ばし、紙袋を
円花に渡す。
円花「お疲れ様です」
家城「あぁ」
円花「勇人のドナー、早く見つかるといいん
だけど」
家城「まぁ、慌てることないだろ」
円花「心臓の移植手術が終わったら、動物園
行きたいって」
家城「世界中の動物園に連れていってやる」
家城、円花を見る。襟足にかすかに白
髪。
家城「おい。白髪」
円花「あ、ごめんなさい」
円花、バックミラーに顔を近づける。

家城「みっともない」
円花「ごめんなさい。すぐに直します」
家城「先、行くぞ」
家城、ドアを開けようとする。
円花「あの、あなた」
家城「なんだ」
円花「書類にサインをいただきたいんです」
家城「またか」
円花「すいません」
家城「良いよ。早く出せ」
円花、ダッシュボードからバインダーにはまった書類を出す。Ａ４の用紙。頭のところが留め具のところで隠れている。
家城、ボールペンを円花から受け取り、書きはじめる。
×　×　×
円花「ありがとうございます」
家城、円花にバインダーを渡すとドアを開けて出ていく。

円花のスマホがバイブレーション。相手はソダ。

円花、電話に出る。

電話の向こうから、低い男の声がする。

曽田の声「酷いじゃないですが奥さん。何度も無視するなんて」

円花「…すいません」

円花の視線の先には、機嫌よく歩いていく家城の背中。そこから足元にある紙袋を見下ろすと、持ち手をぎゅっと握りしめる。

家城の声「まさか、あんなことになるなんて」

○競輪場・スタンド（夕方）

T・「三ヶ月後」

スタンドに人の姿はない。

○同・車券販売場（夕方）

無人。

○同・スタンド（夕方）
無人。

○同・ゴール前（夕方）
家城、スパートが決まらず他の選手に追い抜かれていく。
家城、ゴールを駆け抜けてスピードダウン。
家城、電光掲示板を見る。結果は５着。

○動画配信画面（夕方）
画面上に家城の横顔のアップ。
観客のコメント。
イロ黒【ちゃんと走れよ。借金王】
遠藤なぎさ【金返したきゃ勝て。バカ】

○競輪場の駐車場入口（夜）
次々と高級外車が出ていく。
家城、マスク姿でとぼとぼと歩いて出ていく。

○繁華街（夜）

ほとんど人の姿はない。商店はコンビニ以外、シャッターを下ろしている。

家城、サンダル履き。靴下に穴。

勇人の声「まだ？」

○病院・病室内（夜）

勇人、ベッドの中にいる。前回はなかった防菌カバーがついている。

看護服を着た中川えみり（21）がベッドのそばにモニターをもってくる。

えみり「今、準備してるじゃん」

白衣姿の芹沢志乃（31）入口で腕組みをして見ている。

勇人、焦るようにモニターを見る。

勇人「早く早く」

えみり「ちょっと待っててってば」

えみり、モニターの電源を入れる。

勇人、モニターをじっと見ている。

モニターに映る家城は、マンションの

エントランスにいる。
勇人「パパっ」
家城「元気にしてたか？」
勇人「ママは？」
家城「…」
勇人「ママ、帰ってきた？」
家城「あぁ…まだ、帰ってきてないんだ」
勇人、がっかり。

○タワーマンション・エントランス（夜）
家城、スマホをもって立っている。
上だけジャケットを着ている。ズボンはボロボロ。足はサンダル。
家城「でも、帰ってくるよ。昨日、電話した」
勇人の声「電話？電話したの？」
家城「あぁ。電話したよ。げん…」
勇人の声「（遮って）どうしてぼくに電話くれないの？」
家城「勇人…」
勇人の声「ママは、どうしてぼくに電話くれ

ないの？」

家城の声「全部、ウソだった…二ヵ月前、妻が突然、姿を消した」

○（回想）マンション・室内（夜）

T・「二ヵ月前」

ヤクザ達が、家財道具を運び出していく。

家城、床に倒れて苦しそうにうめいている。顔はあざだらけ。手足を縛られている。

曽田春貴（45）家城の前にしゃがみ込む。

家城「だ、誰だ？おまえは」

曽田「本当に何も聞かされてないのか？」

家城「知らねえよ。誰だ。てめぇは」

曽田「じゃあ教えてやる。俺は曽田。てめぇの嫁に金を貸してやった男だ」

家城「嘘だ」

曽田、家城の顔をぐりぐりと踏みつけ

ながら、胸ポケットから紙を取り出す。
連帯保証人の用紙。車の中で家城がサインした用紙である。
曽田「これが証拠だ」
家城「ぐ、がが」
家城、怒りと屈辱に顔を歪ませている。
曽田「わかるか、これはな、オマエの嫁が逃げたら、オマエが借金を返す義務があるってことを証明する貴重な紙だよ」
家城「円花が、そんなことするわけがない」
曽田「とことんおめでたい野郎だな」
家城、曽田を睨み上げる。
曽田「嫁に、金の管理を丸投げするからこんなことになんだよ」
曽田、家城の顔から足を離すと、嗤いながら部屋を出ていく。
部屋はすっからかん。
家城「ま、まて。まてこの野郎…」
家城、立ちあがろうとするも手足を縛られていて動けない。

大きなリビングについたパノラマの窓からは、都会の雄大な夜景が見える。
窓に張り付くネットニュースの記事。
【家城、資産運用を任せた義兄の不動産会社が２０億円の借金】
【家城の義兄、失踪】
【家城、生涯獲得賞金１７億円から、まさかの借金生活】
【家城の妻、失踪。兄と一緒に逃亡？】
【家城の兄、水死体で発見。妻の行方は依然不明】
家城の声「家から何もかもが持ち出されても、俺はまだ信じられずにいた」
○元のエントランス（夜）
家城、電話を切ると溜息。
若い男性コンシェルジュがくる。
男性「家城さん。これ以上はまずいです…もうここに住まわれてるわけじゃないんですから」

家城「すまんな。もう来ないから」
男性、気の毒そうに家城を見る。
家城、少し笑って出ていく。

○アパート・全景（夜）
今にも崩れ落ちそうな木造アパート。

○同・２０１号室の前（夜）
表札・手書きで【家城】３人の家族の名前が書かれている。
家城、部屋の中に入っていく。

○同・室内（夜）
家城、電気のスイッチを入れる。
電気がつかない。
カーテンのないリビングの向こうの家。
室内が明るく、笑い声が聞こえてくる。
スマホにＬＩＮＥのビデオ通話。液晶に【曽田金融】の文字。
家城の顔色が変わる。スマホをタッチ。

○スマホ画面（曽田金融の事務所の中）（夜）
曽田が映っている。
曽田「また負けたよ」
家城の声「…申し訳ない」
曽田「勝たないと返せないよ、金」
家城の声「えぇ」
曽田「いくら稼いだ？三日で」
家城の声「６２０万です」
曽田「足らないねぇ。三億まで残り二億２５
６０万だ。毎月の利子は除いてね」
家城の声「えぇ」
曽田「息子の治療費も、アンタの部屋代も、
そのスマホも全部うちからの借金だ」
家城の声「…」
曽田「勝たないと借金が増えていくだけだよ。
まぁそれはそれとして…どうする？アンタ
の嫁さん。うちで飼ってる」
○ホテルの室内（夜）
真っ暗な中で、唯一、明かりを放つテ

レビでは幼児向けの番組が流れている。
円花、ごろんと横になっている。
傍には無数の酒瓶。
曽田の声「そろそろ引き取りにきてもらいたいんだが」
○アパートの室内（夜）
家城、スマホを持つ手が震える。目に怒りの炎が灯る。
曽田の声「こっちで飼うのはいいが、それも借金になるんだぜ」
家城、何か言いかけたところで、
曽田の声「それとも、嫁の兄貴と一緒に沈めた方が良かったか？」
家城、何も言わない。
勇人の声「ママは？」
○（回想）病院・病室内（夜）
勇人、家城の映るモニターをまっすぐ見て、

勇人「ママは？帰ってきた？」

○元のアパート（夜）

家城、窓ガラスに映る自分の鬼のような表情に気づき、頭を振ると、硬い表情のまま言う。

家城「金をちゃんと返したら…また、一緒に暮らします」

曽田の声「は？」

家城「また、元の家族に戻します」

曽田の声「本気か、おまえ。いや、正気かよおまえ」

家城「…息子のためです」

曽田の声「…」

家城「まだ母親なんです。息子にとっては」

曽田の声「借りた金はよ、返したらしまいだ。後腐れなんかねぇよ。でもよ、そっちはそれでしまいになるのか？」

家城、驚いた顔で画面を見る。

曽田の声「息子の前から消えちまったことは」

家城「…」
曽田の声「おまえの嫁は、一体、どっちから逃げたんだよ家城」
家城「…金です」
曽田の声「聞こえねぇよ」
家城「金です」
曽田の声「そうか。それなら後腐れねぇな」
曽田、嗤いながら電話を切る。
向かいの家から楽しそうな人の声が聞こえてくる。
家城、スマホを床に投げつける。

○病院・病室の中
勇人のベッドの脇に立つ志乃。
勇人「うん。ママはね、ほんとに絵が上手いんだよ」
志乃「へぇ」
勇人「動物の絵とかね、何でも描けるんだ」
志乃「すごいね」
勇人「うん」

志乃「早くママに会えるといいね」
勇人、うつむく。
志乃「どうしたの？」
勇人「ママは会いたいのかな？ぼくに」
志乃「何言ってるの？会いたいよ。絶対」
勇人「そうかな」
志乃「会いたいに決まってるじゃない」
勇人「…うん」
二人のやり取りをみているえみり。
志乃の声「食事、入ってかないんだ？」

○同・廊下
志乃とえみり、話している。
えみり「はい。おしゃべりに夢中で、ぜんぜん食べてくれないんです」

○公園・園内（夜）
タワーマンションの近くにある公園。
家城、屋根付きの円形ベンチに座ってスマホを見ている。

画面に映る志乃。志乃は診察室にいる。
園内の遊具は、遊べないようにテープが張り巡らされている。【感染症対策】の張り紙。
志乃の声「このままでは、心臓の負担が増えてしまいます」
家城「えぇ」
志乃の声「ドナーが見つかるまでは、少しでも勇人くんの体力が落ちないようにしないといけません」
家城「そんな、お喋りな子じゃなかったんですが」
志乃の声「…」
家城「男…男の子なのに」
志乃の声「…ずっと、お母さんの話をされています。お母さんとどこへ行って、何をして、お母さんの得意なこととか、何度も何度も同じ話を」
家城、ショックを受けた顔。
志乃の声「お母さんのこと大好きなんですね。

勇人くん」
家城「…え、えぇ」
家城、笑顔。スマホを持っていない拳を握りしめる。

○病院・病室の中（夜）
勇人、寝ている。小さな手が何かを探して布団の上をうごめく。
勇人「…ママ、ママ」

○公園・園内（夜）
志乃の声「立ち入ったことを伺うようで恐縮です。奥様はビデオ通話には参加できませんでしょうか？」
家城「…」
志乃の声「勇人くん、喜ぶと思うんです。もっと元気になってくれると思うんです」
家城「実は、少し体調を崩してまして」
志乃の声「そうなんですね」
家城「えぇ。もう少しだけ時間をください。

必ず、参加させますので」
志乃の声「承知しました」
家城「すいません」
志乃の声「それでは、引き続きよろしくお願いいたします」
家城「はい」
家城、電話を切る。わなわなと震える体。拳を振り上げると、力任せにベンチを殴りつける。

○病院・病室の中（朝）
勇人、そっぽを向いて膨れっ面。
モニターの家城は公園の園内にいる。
家城の声「ちゃんとご飯食べてるか？」
勇人「うん」
家城の声「全部、食べてるか？」
勇人「うん」
家城の声「ちゃんと食べないと、大きくなれないぞ」
勇人「うん」

家城の声「勇人。パパ、また遠征だ」
勇人「…」
家城の声「大阪だ。岸和田」
勇人「…」
家城の声「どうした勇人」
勇人「ママ、いつ帰ってくるの？」
家城の声「勇人…少しな、ママ疲れて休んでるんだ」
勇人「ぼくのせい？」
勇人、大きな瞳を開いて家城を見る。
家城の声「何言ってんだ。そんなわけないだろ」
勇人「ぼくが、こんなだから」
勇人の目から涙がこぼれる。
勇人のそばに来てなだめるえみり。
家城の声「何言ってんだ。そんなわけないだろ」
家城の声「レースの前日になると、正直、ホッとする」

○別の競輪場・全景

○同・受付

家城、スマホを女性スタッフに渡す。

家城の声「レース期間、外部との接触は禁止」

家城、その場から離れていく。

賞金を受けとる時、羨望の眼差しで見ていた他の選手たちが、嘲笑しながら家城を見ている。

家城の声「おかげで、俺は少しの間、自由になれる」

○ホテルの室内（夜）

家城、カプセルホテルのようなベッドで寝ている。カーテンの向こうから、若い男の声「先輩。麻雀、やりませんか？人数足りなくって」

家城「いいよ…俺は」

若い男の声「あっ、そうっすか…（ぼそっと）金ねぇもんな」

家城、カッとなりカーテンを開けると
飛び出していく。
若い男の声「な、何するんスか」
もみ合う音。
別の若い男の声「先輩。やめてください先輩」
家城と若い男を止める声。

○同・宴会場（夜）
パーティションで区切られたスペースの中に、パソコンモニターが設置してある。
家城、そのうちの一つにそっぽを向いて座っている。頬にばんそうこう。目の前のＰＣモニターには曽田（曽田の事務所）
曽田「何やってんだてめぇは」
家城「…申し訳ないです」
曽田「俺が裏から手まわさなかったら、出場停止だぞ。ガキじゃねぇんだからよ」
家城「…」

曽田「まぁ良いよ。そう言えば、ドナーがみつかったみたいだな」
家城「え？」
曽田「おまえの息子だよ」
家城「ほ、ほんとですか？」
家城、立ちあがる。

○同（朝）
モニターに映る志乃（病院・診察室）
志乃「ドナー、見つかりました」
家城「あ、ありがとうございます」
志乃「すぐにアメリカへ行きます」
家城「はい。お願いします」
志乃「ただ、一つ問題があって」

○タワーマンション・全景
T・「3日後」
ザーザーと雨が降っている。
家城の声「は、勇人…」

○公園・園内

ベンチを覆う屋根の隙間から雨が降る中、家城、スマホを持って困り顔。

○スマホ画面（病院の病室）

勇人がふくれっ面で座っている。

勇人「ママに会いたい」

家城の声「すぐ、アメリカに行かないとダメなんだよ」

勇人「いやだ。会えないならいかない」

家城の声「勇人。死んじゃうんだぞ。ちゃんと手術しないと死んじゃうんだぞ」

勇人「ママに会えないなら…死んでいい」

家城の声「勇人…」

志乃、入ってきて、

志乃「勇人くん。お母さん、体調が良くないのよ。だから…」

勇人「いやだ。ママに会いたい。喋れなくてもいいから、お顔が見たい」

志乃「勇人くん…」

家城の声「わかった。じゃあ、ママに聞いてくるから」
勇人「ほんと？」
家城の声「うん」
勇人「約束だよ」
家城の声「あぁ。約束する」
×　×　×
家城、スマホを見ている。
家城の声「と、言うことでして…」

○スマホ画面（曽田の事務所）（夜）
曽田「別に、俺はかまわんけどな」
家城の声「よろしくお願いします」
曽田「まぁ、ある程度の覚悟はしとくんだな」
家城の声「覚悟、ですか？」

○ホテルの廊下（夜）
家城、７０２号室の前に立っている。
カードキーを差し込み、室内へ。

○同・７０２号室の廊下（夜）
家城、真っ暗な廊下を歩いていく。
○同・リビング（夜）
テレビの光だけが室内を照らしている。
テレビに映るのは幼児番組。
その前にごろんと横になっている円花。
家城、入ってくるとうっ、と口と鼻を
塞ぐ。
家城、足元の酒瓶に足をとられ、尻餅。
家城「いてっ」
室内のあちこちに酒瓶が転がっている。
中には割れている瓶もある。
円花、身じろぎ一つしない。
家城、恐る恐るといった感じでテレビ
と円花の間に入っていく。
円花、瞬きもせずテレビを見ている。
家城「おまえ、円花か？」
円花、髪はぼさぼさ、目ヤニだらけ。
家城「うっ、なんて臭いだ」

家城、鼻をつまむ。
家城「みっともない。立て」
家城、円花を立たせようとするも、人形のようにぐったりしている。
家城「何をやってんだオマエは。立て」
家城、反対の手で円花の頬を打つ。
円花、打たれるまま反応がない。
家城、円花を床に放る。バタンと大きな音がする。
家城「おい。いい加減にしろ」
円花「…帰って」
家城「なんだって？」
円花「全部、私が悪いんでしょ」
家城「あぁ、そうだよ。お前のせいで、俺はすべてを失ったんだ」
円花「…」
家城「でもな、俺は、オマエと、オマエのバカな兄貴に騙された金を返すために、今、必死で働いてる」
円花「…」

家城「勇人のためだ」
円花「…」
家城「情けない。ほんとに、何をやってんだ
オマエは」
円花「…死にたい」
家城「バカ。母親だろお前は」
家城、円花の背を叩く。何度も、バシ
バシと。
家城「勇人が頑張ってるんだぞ。勇人が…」
円花「…どうでもいい」
家城「…な、何だって？」
円花「もう、どうでもいい」
家城「オマエ、自分の息子だろ」
円花「…関係ない」
家城「オマエ、どうかしてるぞ」
円花「…別れてください」
家城「立て。帰るぞ」
円花「いや」
円花、初めて抵抗する。
家城「何言ってんだ。帰るぞ」

円花を立ちあがらせようとする。
円花「帰らない。いやだ、いやだ」
円花、それまでが嘘のような抵抗。

○（回想）病院の入口
円花、疲れた顔で出てくる。

○（回想）病院のそばにある公園
円花、入口で園内を見ている。園内で楽しそうに遊ぶ子供たち。
円花のスマホが鳴る。液晶画面に【病院】円花、電話に出る。
えみりの声「家城さん。すいません。勇人くんが…」

○（回想）通り
円花、泣きながら走っている。
円花「なんで私だけ、なんで私だけ…」
息切れしていく円花の声。

○元の室内（夜）

円花「全部、あの子のせいよ」

家城「何だと」

円花「あの子のせいで、私の人生が狂ったの」

家城「何言ってんだオマエは」

円花「あの子が普通だったら。あの子が…」

家城、円花の頬を打つ。

家城「だ、黙れ」

円花、怒りを込めた目で家城を見ると、

円花「あの子のせいよッ」

家城「黙れ」

家城、円花の口を塞ごうとうする。円花、家城の手にかみつく。

家城「いたっ。オマエ」

家城、円花の頬を打つ。

円花「あの子のせいで、あの子のせいで…」

家城「黙れ。黙れ、黙れぇ」

家城、円花の首を締める。円花、抵抗。

×　×　×

円花、ぐったりしている。

家城、はっとなる。
家城「お、おい。円花？円花？」
家城、円花の頬を打つも反応がない。
家城「おい。おいって」
家城、円花を揺さぶる。
家城「おい起きろ。おい。おい。おい。おい」
家城、円花を揺さぶりつづける。
曽田の声「やめとけ」
家城、振り返ると曽田が立っている。
家城「曽田さん。救急車、救急車」
曽田「無駄だよ。死んでる」
家城「救急車をッ。お願いします」
家城、震える手でスマホを取り出す。
曽田、家城のスマホを蹴飛ばす。
家城、四つんばいになり足をガクガク
震わせながらスマホを拾いにいく。
曽田「仕方ねぇ。埋めに行くぞ」
家城の動きが、ぴたっと止まる。
テレビから流れるニュース映像。
女性の声「政府は感染拡大を受け、本日から、

夜間の外出禁止令を発令しました。車での外出も禁止です。例外はコンビニや医療関係など…」

○曽田の運転する車・車内（夜）

警備会社の車。運転する曽田と助手席の家城は、警備会社の制服を着ている。

家城、ぼーっと窓の外を見ている。

○どこかの山奥（夜）

曽田、シャベルで穴を掘っている。

かたわらに布に包まれた円花。

家城、車の助手席でうつむいている。

×　×　×

曽田、穴を埋める。

布に包まれた円花がなくなっている。

曽田「よし。こんなもんか」

曽田、車内にいる家城を見て、溜息。

曽田「ま、仕方ねぇか」

曽田、車に戻っていく。

○曽田の運転する車・車内（夜）

家城、流れていく景色を見ながら、

家城の声「俺は、人を殺してしまった…しかも、家族を。妻を」

家城、ぼーっと窓の外を見ている。

家城の声「これは夢か？夢じゃないのか」

○アパートの室内（明方）

家城、抜け殻のように座っている。

窓の向こうから赤ん坊の元気な泣き声。

○公園・入口（朝）

入口に立ち入り禁止のテープ。【感染症対策のため全面禁止】の文字。

家城、今にも倒れそうなくらい荒い呼吸で歩いてくると、立ち入り禁止のテープを見つけ、強引にテープを破り、中へ入っていく。

○公園・園内（朝）

ベンチに座る家城。スマホを持つ手が震えている。
空は、気持ち悪いくらい晴れている。
スマホに着信。液晶に【病院】の文字。
家城、震える手で出ようとしてスマホを落としてしまう。鳴り続ける電話。
家城、拾おうとした手が止まる。それでも止まない電話。
家城、胸に手を当てて息を整えると、スマホを拾い上げ、電話に出る。

○スマホ画面（病院・病室の中）（朝）
にこにこの勇人が映っている。
勇人「ママは？」
家城の声「マ、ママな、元気にしてたぞ」
勇人「ママは？」
家城の声「ママな、元気にしてた」
勇人「嘘つき」
家城の声「勇人」
勇人「パパの嘘つき」

勇人、ベッドから降りようとする。防菌カバーが邪魔をするも、払いのけようとする。

えみりと志乃が止めにくる。

えみり「勇人くん、待って」

志乃「勇人くん、ここから出たらダメなの」

勇人「いやだ。いやだいやだ。ママに会いにいくんだ」

○公園・園内（朝）

家城、スマホを茫然と見ている。

勇人の声「ママに会いにいくんだぁ」

×　×　×

家城、スマホ（電話）に必死に話しかける。

家城「つ、妻に、会いたいんです」

曽田の声「イタコでも呼ぶか？」

家城の声「妻に、会えませんか？」

曽田の声「おい。オマエまでおかしくなっちまったんじゃねぇだろうな。いいか家城。

てめぇの嫁はな、死んだんだ」
入口に警備員の姿。テープが破られていて、中にいる家城を見つけて怒り顔で入ってくる。
曽田の声「てめぇの手で、殺しちまったんだよ」
曽田の声が、園内に響きわたる。
警備員の足が止まり、顔に怯えが走る。
家城、その存在に気づいていない。

○通り
家城、うつむいて歩いている。電話が鳴る。液晶画面に【病院】
家城、電話に出る。
志乃の声「すいません。先ほどは」
家城「勇人は？」
志乃の声「今は寝ています。興奮すると疲れてしまうので」
家城、志乃の言っていることがよくわかっていない顔。

志乃の声「すいません家城さん。何か、奥様の持ち物で、お借りできるようなものございませんでしょうか？」
家城「持ち物、ですか？」
志乃の声「時計でも、ネックレスでも何でもいいんです」
家城「…」
志乃の声「海外への旅行は、すでに禁止されていますが、まもなく、理由関係なく全面禁止になる可能性があります」
家城「…」
志乃の声「家城さんッ。このままだと、勇人くんがアメリカで手術を受けられなくなってしまうんですよ」
家城、はっとなる。
×　×　×
家城、電話している。
曽田の声「ふざけんじゃねぇ」
家城「…」
曽田の声「行きたきゃ、てめぇ一人で行け」

家城「ば、場所が…」
曽田の声「ナビに記録してあんだろ」

○警備会社の車・車内（夜）
家城、警備会社の制服に着替えもせず運転している。ナビが指し示す先へ。
曽田の声「いいか。サツに捕まったら、ただじゃおかねぇからな」
両脇が林のまっすぐな通り。
家城、目を血走らせて運転。
目の前にたぬき。
家城、ハンドルを切る。路肩の林に車をぶつけてしまう。

○路肩（夜）
車のタイヤが外れている。
家城、茫然とみている。
通りは、かすむほど先が長い。
家城、歩きはじめる。

○通り（夜）

林の間に、一台の自転車が放置。

家城、その自転車に乗り、走りだす。

○山奥（夜）

家城、素手で土を掘っていく。

×　×　×

家城、円花の死体に行きつく。もう骨が出かかっていて、家城、吐いてしまう。その胸元にネックレス。

家城、目をつむりながら、首にかかっているネックレスをとる。髪の毛が指に引っかかり、悲鳴をあげる。

家城「うわぁ。うわっ」

家城、髪の毛を指から払いのける。

○さきほどの通り（明方）

家城、自転車に乗って走っている。

その手には土塗れのネックレス。

家城の手足は土まみれ。

○（回想）家城のマンション・寝室
家城、玄関ドアの閉まる音で、目が覚める。

○（回想）同・リビング
家城、円花を怒っている。
家城「おまえが出ていく音で目が覚めたじゃないかッ」
円花「ごめんなさい。でも、急に病院に呼ばれちゃって」
家城「馬鹿野郎。俺は明日から、グランプリなんだぞ。日本一がかかってんだぞッ」
円花「ごめんなさい」
家城「負けたときの責任がオマエにとれるのか？」
円花「勇人のことで…」
家城「（遮って）オマエはいつも、口を開けば勇人勇人って、勇人のことはお前に任せたって、何度言えばわかるんだ」
家城、円花の頬を打つ。

円花「すいません」
家城「バカヤロウ。それから部屋の中、みっともないから綺麗にしとけ」
円花「申し訳ございません」
家城、寝室に去っていく。
リビングには畳みかけの洗濯物が残っていて、ダイニングには食べ終えた食器がそのまま置いてある。
円花、ぽつんと一人で見ている。

○元の通り（明方）
林の向こうの雲間から、太陽が顔を覗かせる。
家城、眩しそうに目を細め、足元をふらつかせる。

○繋華街の十字路（朝）
信号待ち。
家城、自転車にまたがったまま停まる。
競技用自転車に乗った男性が隣に停止。

男性、家城の顔を見て目を輝かせる。
男性「もしかして、競輪選手の家城さんですか？」
男性、家城を見る。全身泥だらけで、左手には土くれのくっついたネックレスを持っている。
男性「い、家城さん？」
家城、何も言わない。
信号が青に変わると走りだす。

○病院の入口（朝）
家城、自転車を投げ捨てると駆け込んでいく。入口は封鎖されている。
家城「すいません。すいません」
家城、ドアを叩いていると、防護服を着た警備員が裏口から出てくる。
警備員「ダメダメ。何しにきたんだ。アンタ」
家城、警備員に近づいていく。
警備員、家城の異様な風体に後ずさり。
警備員「なんだよ。近づくな。近づくなって」

家城「すいません。コレを。コレ」
家城、立ち止まるとネックレスを差し出す。
警備員「あれ？あんた、家城さんか？どうしたの家城さん」
警備員、家城に駆け寄っていく。
家城、その場に倒れてしまう。

○病院の駐車場（朝）
T・「二日後」
勇人、ストレッチャーに乗せられている。傍に付きそう志乃とえみり。
勇人の手には、円花のネックレス。
志乃「頑張ってね。勇人くん」
えみり「がんばれ」
勇人「うん」
志乃「良かったね。お母さん」
勇人「うん」
勇人、嬉しそうにネックレスを握りしめる。

○空港

一機の飛行機が飛び立っていく。

大きな歓声。

○競輪場・全景（夕方）

T・「半年後」

続々と客が入っていく。

○同・スタンド（夕方）

満員の客。

○同・車券販売場（夕方）

満員の客。

電光掲示板・オッズ一番人気は家城。

客「家城ぃ。頼むぞぉ」

鐘が鳴る。選手たちのスピードが一気にあがる。

○同・バンク内（夕方）

家城、まっすぐ前だけを向いている。

家城の声「息子の手術は、成功した」

○病院・病室の中（夕方）

勇人、パジャマ姿（ニット帽はかぶっていない）でモニターを見ている。

モニターには家城。

勇人「パパ。頑張って」

○競輪場・最終ストレート（夕方）

家城、ラストスパート。

○同・ゴール（夕方）

家城、一位でゴールし、ガッツポーズ。

家城の声「俺は、これから、息子と二人で生きていくんだ」

○病院・病室の中（夕方）

勇人、飛び上がって喜ぶ。

志乃、嬉しそうに勇人を見ている。

えみり、勇人の姿に思わず涙。

○競輪場・最終ストレート（夕方）
家城、観客に向かって手をあげる。
大歓声。

○同・バンク内（夜）
家城、マスコミの写真撮影に応じている。パシャパシャと写真を撮る音（以降、写真を撮る音がつづく）

○曽田の事務所・全景（夜）
曽田、手錠をはめられて刑事に連行されていく。
マスコミがカメラを構えて群がる。

○山奥（夜）
ビニールシートで覆われた死体現場。
数人の警察官がいる。

○同・ビニールシートの中（夜）
白骨化した死体にフラッシュが焚かれ

る。

○競輪場・バンク内（夜）

家城、フラッシュに眩しそうに目を細め、嬉しそうに笑う。

○競輪場・バンク内（夜）

家城「もういいでしょ。勘弁してよ」

＊カメラの音、終了。

家城の声「俺はこれから、息子と一緒に、息子と…」

ドタンと勇人がベッドから落ちる音。

志乃の声「は、勇人くん？」

○病院・病室の中（夜）

勇人、ベッドから落ちて倒れている。

志乃とえみり、慌てて駆け寄っていく。

えみり「大丈夫？勇人くん」

勇人、顔をあげると大きく笑う。パジャマの胸元から覗く円花のネックレス。

勇人「やった。やったぁ」
勇人、部屋を飛び出していく。
志乃とえみり、顔を見合わせてホッ。

○同・廊下（夜）
楽しそうな顔で家族連れが歩いてくる。
幼児が、両親の間に挟まり、手をつなぎながら。両親、勇人に向かって、
両親「こんばんはぁ」
勇人「こんばんは」
勇人、３人の脇を駆け抜けていく。
女性（両親の母親側）「あれ、ぼく、パパとママは？」
勇人、振り返ると笑顔になり、
勇人「うん。パパはね、今お仕事してる。ママはね、もうすぐ会えるんだ。もうすぐ」
女性「そう。良かったね」
勇人「うん」
家族連れ、去っていく。
病院の前を、数台のパトカーが駆け抜

けていく。
勇人、窓の桟に身を乗り出して見る。
勇人「わぁ」
追いかけてきた志乃、勇人と並んで見る。
志乃「パトカーだ。知ってる？パトカー」
勇人「うん」
志乃「勇人くん、大人になったら刑事になったら？カッコいいよ。悪い人捕まえてさ」
勇人、首を横に振る。
勇人「ぼく、競輪選手になるんだ。パパみたいな」
パシャパシャと写真を撮る音（以降のシーン、ずっと続く）
○曽田の事務所の前の通り（夜）
何事もなかったかのような喧噪。
ここでも写真は撮っていない。
○山奥・ビニールシートの中（夜）

運びだされていく遺体。
誰も写真は撮っていない。

○競輪場・バンク内（夜）
家城、嬉しそうに手をあげている。
記者の声「家城さん。優勝の喜びを、誰に伝えたいですか？」
家城「もちろん息子です。息子の勇人しかいないでしょう」
パシャパシャと写真を撮る音が止まない。

○同・全景（夜）
パトカーが集まってくる。

○同・バンク内（夜）
記者の声「家城さん。ガッツポーズお願いします」
家城、笑顔でガッツポーズをする。
家城「早くしてくれ。俺は早く息子に会いた

いんだから」
記者から笑い声が漏れる。

○同・全景（夜）
パトカーから、刑事が降りてくる。

○同・バンク内（夜）
家城、ガッツポーズしながら、
家城の声「俺は今日、息子に妻のことを話すと決めた。息子ならわかってくれる。きっと、わかってくれるはずだ」